英　国　雑　感

白　藤　純　嗣*

本欄の執筆者としてはいささか年をくっている感じであるが，男性の平均寿命が73才を越えて世界一になったことでもあるし，精神的には大いに若いつもりなので敢えて筆をとらせて頂くことにした．British Research and Engineering Council から Senior Visiting Fellow として招待を受け，Sheffield 大学電子・電気工学科に1981年1月から1年間滞在する機会を得たので，その間に感じたことなどを思いつくままに書いてみたい．Sheffield 大学については今年の新春号**で正法寺氏が書いておられるので蛇足と思われるが，金属・治金関係以外の人には比較的なじみの薄い街なので初めに少し紹介したいと思います．

England 地方のほぼ中央に位置する Sheffield 市はかって世界一の技術と品質を誇った銀製品と cutlery の街で，Town Hall 玄関にはその昔をしのぶため大きな銀のコンポートが飾られています．また，第2次大戦までは世界有数の鉄鋼の街として栄え，中学校の社会の教科書にも載る程に名が知られていたわけですが，戦後はご他聞に洩れず近代化の波に乗りそこね今では見る影もない位に衰退してしまっています．市当局も今後会議（conference）の街として人を呼び込み昔の繁栄をいささかでも取り戻そうとやつきになっています．しかし，銀のナイフやフォークの類には Sheffield made の銘が今でも高級高品質を保証するマークとしてご利益を持っています．市中心にある Cutlery Hall や Sheffield–London 間を2時間半で結ぶ inter-city（急行列車）の Master Cutler といった名前にも昔のなごりが残されています．

英国では市街地同志がきびすを接して連なるようなことはなく，人口約54万人の Sheffield 市でも市の中心から車で5分も走るとターナーの風景画通りの牧歌的情趣のあるなだらかな丘陵に出ます．北部を除いて，国中どこに行っても広々した農場や牧場が目につきますので，産業革命発祥の地というより，本質的には農業国ではないかとさえ感じます．

英国に来て驚くことの1つは農地以外に土の露出している個所がほとんどなく，いたるところがきれいな芝生に覆われていることで，約2000年前にはほぼ全土がうつそうとした森林に覆われていたとはとても信じられない位です．海流の加減で霧は多いが，夏涼しく冬の寒さも厳しくない恵まれた気象条件のお蔭で，真夏に散水する必要もなく芝生が年中青々しているのに反し樹木の生育が遅いことを考えると，芝生に覆われた光景はいわば必然的帰結なのかも知れません．このような夏冬一着の背広でも間に合う気象条件のせいもあって季節の移り変りは日本ほど明瞭でないように感じられます．4～5月にかけて水仙やヒヤシンスの花が咲き，8月遅くヒースの花（heather）が遠くのヒースの丘（heath moor）を薄く赤紫色に染めることはあっても，我が国のように，早春にはもんしろ蝶が舞い，夏は蝉しぐれにうたた寝を破られ，秋にはさびしい虫の音色に世の無常を感じるといった風な四季折々の虫がいないことが益々季節感を稀薄にしているように思われます．このような季節感の稀薄さが変り身の遅い頑固な国民性を形成したと考えるのはうがち過ぎでしょうか．季節の変り目が比較的はっきりした我が国では（最近，気候，食物，風俗すべてに季節感が薄れつつあるのは極めて嘆わしいが），衣替えや四季の虫花に季節の移り変りを敏感に感じとり，それを節目として何事への意欲も自

* 白藤純嗣（Junji SHIRAFUJI），大阪大学，工学部，電気工学科，助教授，工学博士，半導体材料

** 生産と技術 34（1982）59.

ら新らたになり，変り身の早い柔軟な国民性がはぐくまれたのではあるまいか．

北海油田によって一息ついたものの，経済的地盤沈下のため英国では失業者が街にあふれ，今では300万人を超えています．この不況はおいそれと解消されそうにありませんが，このような経済的困難を招いた原因として，生産性向上のための自動化量産化に遅れをとった工業政策上の失敗もさることながら，労働組合（Trade Union）が職種別の横割り組織で構成され，我が国のように企業単位の縦割りでないため，ストライキによる影響の及ぶ範囲が極めて広く，職種の変更を伴う配置転換が不可能なこと，日常生活が家庭中心で転勤による単身赴任は絶対といってよいほど出来ないこと，個人中心の考え方が強く employer への帰属意識が薄く，頑固な John Bull 魂が根強いこと，などが相乗的に作用して企業経営の柔軟性をなくしていることが最大の原因のように思われます．他の原因として，高等教育の普及度の不足が挙げられるように思われます．現在，英国（England, Wales, Scotland）には51の university，31の polytechnic および14の Scotish Central Institutionがあるが，収容人員は高校(Secondary School）卒業生の約10%です．残りの90%の生徒は16才で Secondary School を卒業して就職口を探すことになります．日本での高1か高2にあたる中等教育を受けただけで一流企業に勤め口が見つかるとは思えないし，企業内教育によって社員の技術レベルを向上させるシステムをとっている会社もないようだから，彼等は生涯単純労働程度の職にしかつけないと思われます．この状態では企業の内部ポテンシャルが上昇することはなく，国民全体の知的水準を高めてこそ，工業の近代化を推進でき，自動化による余剰労働力を新設部門に転換することも可能となると思われます．また，個人の教育レベルが高い程，新しい知識の吸収，技術の習得あるいは職場での配置替えにも柔軟性を発揮できるのではあるまいか．従って，悪循環の打開には，時間はかかるが大学を拡充して進学率を高める以外には手がないように思えるのであるが，サッチャー政府が1981年から3カ年に大学予算を25%削減することを決めたことは，いくら経済的にどん底状態にあるとはいえ，大局を見誤った近視眼的施策と考えられる．

日本ほど進学熱は高くないにしても大学の数が少ないから一流大学の人気の高い学科に入学するにはかなり激甚な競争に勝たねばなりません（法律や基礎理学の人気が高く，工業を低く見る風調も1つの問題点と思われますが）．特に Oxbridgeに合格するには高額の授業料を払っても全寮制の私立学校に入れる必要があり，教育ママ・パパが出現する．かくして Oxbridge をはじめ有名大学では裕福な家庭の子弟が大半を占めるという我が国の事情と良く似た状態となる．古き良き時代に培われた階級意識は今でも根強く残っていて，大学では faculty staff と学生とはお茶を飲む部屋が区別され，学生寮では senior member は一段高い所で食事をする（high table）といった習慣が現存しています．このことは，どの大学をどんな成績で卒業したかということがその人の将来のかなりの部分を決定するといったことにも通じているようです．

与えられた紙数が尽きましたが最後に一言付け加えさせて頂きますと，紳士の見本のように考えられている英国人も色々変った面を持っているようです．例えばジョーク好きの人種であると一般に考えられていますが，テレビ番組はコメディがやたら多くて，あくの強いコメディアンが飛ばす方言を効かした駄じゃれにゲラゲラ笑うとか，子供を厳しくしつけ家の回りや庭の花壇や芝生は手入れが良く行きとどいているのに，公園の芝生や歩道わきには至るところ犬の落し物があるとか，何故捕鯨禁止運動に異常なほど熱心なのかとか，まだまだ研究を要する複雑な性格を有する人種であるらしい．「敵を知り己れを知れば百戦危ふからず」という孫子の兵法訓の通り，互いの交流を深め，相手を良く知ることが学術・技術の協力関係を緊密にし，経済摩擦を減らす一助となると思われる．今後共人物交流の機会を出来るだけふやしたいものである．